紅葉一名

時雨をいとゝ紅葉ちるぐゝ
山路を尋ぬ　見ハてのあるに
住女ぶる　宮ゐ　ゝ　浮世よ
を　ゝ　今　ゝ　雲乃ハ色
むら　ゝ　ゝ　宿乃　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
人　ゝ　ゝ　秋の　ゝ　菊
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]
[illegible]夕日蒼然たる
[illegible]
[illegible]
さに　ともあれ出れば乃への嵐
[illegible]
乃至も目にそれて　下をみち夜れ
[illegible]
まの露や深つらしぐれたの面
[illegible]
色きのふよりも色ふかきに弁財
[illegible]
お行くこれ山深き宮や谷門ふぼの

[illegible]
[illegible]
ぬもみち葉をぶくらに錦中たえ
と笑ふ　ともに立よりて四方の梢
をなつめて出りぬ　[illegible]や[illegible]紅へや
面白や此き長月晴天日あまり四方五
[illegible]
[illegible]
[illegible]

去へ乃狩場の赤ぐろよりかも去乃ち
こゝ二首拾こ
夏うれ　明ぬとく野邊より山に
りれ去のれ跡ゆ　元
詞のりなすこゝいさをなり　寺屋
おうやうけ心のありさりぐべ聖
乃もくき露ハきく行来もとゆき山
信の去の実のちこのさりきよりぢ
元

こゝ　風乃行ほをこゝ
こゝ　風に拜をこゝ
こゝ　風に行ほをこゝ
上七
せよく　とに行う方　以前よい
月十
あれ山陰よ西乃て人かけの見て
作ハいりれ去そ君を為く事ゆ
上七
長てしぶ拝寺ゆくりやーとち紀
工藤のぎくうち陰り屏風をて
西妻乃なうをとゆ見そ紀ゆ紀ゆ慰よ

たつのてい原をたゞちに去
陸奥のくにの中の道のきや此
あるじのみく方様乃人をなれもよう
すしぐ酒にくもあれ上らう乃ぞ
れかとゝのの為乃ばかり酒宴乃半
ばに菊と桜とをうつふけを
馬より下りて酒をぬさぐみちを

元禄二年三月十二日

元禄二年三月十二日

とゝて い山うの景乃をちゆる
こゝこゝ 元禄二年三月十三日
紙ふ心つうれそたくしおさく
元禄二年三月十四日
宮や敷ゐうぬ永にほとの山乃おくに
こゝこゝ 元禄二年三月十五日
あそべハきうしとうとゝて指詠
こゝこゝ 元禄二年三月十六日
せうもみう樂ばゞ安ゝ敷のうま
こゝこゝ 元禄二年三月十七日
き 春乃酒とも者引酒やこ
こゝこゝ
やるゝ酒とたゞをうきくみ不汁也

きのふもけふも徒らに過し暮らして
ぬ道の邊は便りに立よる頼もし
おもはよらされは事や何しよ我を
なとめ給ふ恵みとさしぬやしにく
ましは情ある中や一村の
乃雨やとりも一樹の陰に立寄
一河の流れをくむを以つて見

まして結ぶ縁もちかきも
様にすかるとてもなけれども岩木
ならぬ身は心よりくもたちて
所は山路の菊の露ゆうべくれて
れへ行 虎渓を出し伴ひへ
まことに捨てし聖人の情の
道のかたき契り忘れめしとこそや

村雨よりはをりかけめくるあきはたく
下一百
ぜうや老たる面白や有しに昔りの上
乃若草ろ〻ぶ〻神を紅葉衣の
元下一二
ぶ〻れる井深き秋のつゆ哉　この世
一百二
玄人とも思ひしきれを陶うさぎ計
元下一百
秋の　月すゝ人心乱るゝ
竹かしの露ゆたるようをとる

三
思ひうつるも盃に入るうる心哉
三百
つきぬ佛をいまめしろハ海
多をれとゞに飲湯をやすかハ
元三千
邪婦妄語の法をに乱心ハ花うゝ
元三
ゆ秋婆さきい世すだらはゆ
乃山桜ゆうの見るめもいのちん
上
ゆ月見是とゝを前世の契王清

うりぬぐ涼き情れ笑ひて打し
もろれへの草葉乃露哉一とを
う方てそ新し行末ぢ栄ろもを
ぬうら涼をにぐ人乃こゝ紅も志ゝ雲の
たらヨつゝへば手きうれ系くて
時刻をうつすり雲よあゝ拝す
うりぢれう百万乃蒼城の神乃契り

下ゝ乃よう掛ぐ月のさうり女子袖も
雲をゝくらと波ゝ乃えをこうよう
三月
えすゝ紫せいたゝのち堺す紅
葉青苔の地又是涼風くれ行色に雨
うりそゝを夜嵐の地冷しき山信ゝ
月待程のうゝ色よがゝを袖も
雲深し夏そ下さま紛ふるよく

蓋浮きや我ぢく玉明の消ぬ砕心
まと絵山陸もうれうにぐうた成
きう義ぬ告と　驚く松か雷火乱れ
天地もいい知風金金のぐ門きも知
ぬ山中よばばはつうるやおるやや
上三の
ゆきやし迷のうの女ぐれこ紀
生の涙を形成を昇かて火焔を

きちまはこ屋をよりのほをふ原
咸陽宮の煙の中にぜ尺の屏風の上
に拡ぬまちまち丈の鬼神が
角ろ火赤眼ハ日面をもくへき様
そるよ　惟義少もさをして
下百
これもち少ちさりを市童や
元元
い情大義義と必ず会しづれき拡板

て祈りを行へども微塵よりしと死
さかりをどれちうこれむとときく兇
神のまし中さしとなす所を頭を清
うしてあうらしとまち切拂ひ給
色只劔よ恐まそ巖にのぼるをゴお
祈さ通しうちち兇神を隨へ
除ふ國堺乃祖てそなう祈け礼